

翻訳通信

翻訳と読書、文化、言葉の問題を幅広く考える通信

目次

翻訳教育の可能性

山岡洋一

- 英語教育の盲点としての翻訳教育

日本の英語教育は文法偏重で読解力に偏っており、もっと会話を重視しなければならないといわれている。ほんとうにそうなのだろうか。

私的ミステリ通信 (第7回)

仁木めぐみ

- 猫は……？

シャム猫ココと元新聞記者のジム・キラランが事件を解決するミステリ、リリアン・J・ブラウンのココ・シリーズを紹介する。

誰も教えてくれなかった英語 (第12回)

柴田耕太郎

- 翻訳と日本文化

今回はいつもの細かい英語読解技術解説は止めにし、大上段から翻訳の日本における役割を書いてみる。気楽に読んでください。

翻訳通信 〒216 川崎市宮前区土橋4-7-2-502 山岡洋一 電子メール GFC01200@nifty.ne.jp

『翻訳通信』は有料会員制の媒体にする予定ですが、当面はテスト期間として無料で配信します。

定期購読の申し込みと解除 <http://homepage3.nifty.com/hon-yaku/tsushin/index.html>

知り合いの方に『翻訳通信』を紹介いただければ幸いです。

『翻訳通信』を見本として自由に転送下さい。

バックナンバー <http://homepage3.nifty.com/hon-yaku/tsushin/index.html>

英語教育の盲点としての翻訳教育

アメリカ南部の小都市に行って間もない友人から手紙がきた。英語には自信があったのに、話がほとんど聞き取れず、「小学生なみの会話能力」しかないと嘆いていた。

こういう話を聞いたとき、人が考えることはだいたい決まっている。ためにしに周囲の人にこの話をしてみるといい。話はこう発展していくはずだ。英語に自信があるというのは、学校で英語の成績が良かったというだけのことだろう。日本の英語教育は文法偏重で読解力に偏っているから、何年やっても日常会話だつてろくにできるようにならない。もっと会話を重視しなければ駄目なんだよ……。

これが常識になっていて、だれに聞いてもたいていは同じ答えが返ってくるのであれば、ほんとうにそうなのか、疑ってみるべきだと思う。常識的で決まりきった答えというのは、じつはだれも真剣には考えていない答えであることが多いからだ。真剣に考え、事実をみていけば、違った答えがでてくる可能性だってある。もちろん、常識が正しい場合の方が多いだろうが、正しいとはかぎらないのである。

たとえば、こういう体験をしたことがある。アメリカ人、それも深南部の出身者とオーストラリア人が話しているのだが、どちらも相手の話が聞き取れないようで、ちんぷんかんぷんになっている。その場に日本人や韓国人が何人かいたのだが、みな笑いだしてしまった。後でそのアメリカ人にあったとき、あのオーストラリア人の英語はほんとうに分からない、半分ぐらいしか聞き取れないというと、アメリカ人が驚いてこういった。「ほんとうに半分も聞き取れるのか、おれなんか4分の1も聞き取れないぞ」

英語教育とか英語学習とかいうとき、英語とはひとつのものだと思っている。もちろん、イギリスとアメリカで違いがあることは知っているが、それでも標準的な英語、標準的な米語があって、それを学べばいいと考えている。だが事実は違っている。たとえば、アメリカ深南部の出身者、イギリスのオックスブリッジ、シンガポールの貿易商、オーストラリアの田舎者の4人が話しているのを聞いたら、昔流行った四か国語麻雀のようで、英語を話しているのはオックスブリッジ

だけだろうと思えるはずだ。インドの技術者や、イギリスのフリーガンや、スコットランドの田舎者や、シリコンバレーの起業家や、ニューヨークの弁護士や、アメリカ軍下士官や、職業も肌の色も違う人たちが集まれば、話が通じるとは思えない。英語はそれを母語にする人たちの間ですら、じつに多様なのだ。嘘だと思ふのなら、ヒギンズ教授に聞いてみるべきだ。

そのうえ英語は国際語であり、いまや世界語といってもいいほどになっている。だからこそ英語を学ぶのだ。たとえば韓国人や中国人、アラブ人、ロシア人、ドイツ人などと話すときにも英語を使うのが普通だ。世界各国にはさまざまな英語があり、日本人にとって話が聞き取りやすい場合もあれば、聞き取りにくい場合もある。

いや、英語に限ったことではない。どの言語でも多かれ少なかれ同じことがいえる。日本語の場合、テレビの影響で地域差が少なくなり、方言で困ることは少なくなったが、それでも職業や趣味や世代による言葉の違いはかなり大きい。隠語のような片仮名語だらけの話についていけないと思った経験は誰にもあるはずだ。たとえば、スプリットタンって知ってるだろうか。知らない方がいいかもしれない。知ったら吐き気がする人もいるだろうから。

アメリカ南部の小都市に暮らして、地元の人たちが話している言葉が聞き取れなくても、それは当たり前のようにすぎない。日本の英語教育が文法偏重だろうが何だろうが、それとはまったくいいほど関係のない話なのである。

帝国大学文科大学英文科を卒業して2人目の文学士になった夏目金之助がロンドンに留学したとき、英語が分からなくて困ったという。明治時代にも日本の英語教育は文法偏重で読解力に偏っていたからだという話があるが、とんでもないことだ。2人目の文学士を誰が教育したのか。お雇い外国人に決まっている。お雇い外国人はキングズ・イングリッシュを話す。ロンドンの下町に下宿した夏目金之助がコクニーに難儀したのは当たり前ではないか

敗戦後に占領軍が来たとき、英語教師のほとんどは

ろくに会話もできなかったという話もある。戦前に教育を受けた英語教師なら、キングズ・イングリッシュを学んでいる。GI米語を理解できなかったとしても、何の不思議もない。それに敗戦国の国民が占領軍の将兵ととともに話せるはずがない。骨がある人間なら、話そうと思うはずがない。

会話は慣れである。短期間の海外旅行の場合、話をする相手のほとんどは、こちらが英語に不慣れなことをよく知っているので、ゆっくり分かりやすく話してくれる。それでもはじめはなかなか聞き取れないし、英語が口からでてこないが、1週間もすると慣れてくる。外国に住んだ場合はそうはいかない。相手のほとんどは言葉が不得意な外国人と話すことには慣れていないので、なかなか話が通じないものだ。

最悪のケースは非英語圏で、まったく言葉が通じない国に住んだときだが、その場合でも数か月もすれば、日常会話には苦勞しなくなる。だが、たいていは日常会話以上にはなかなか上達しない。よほどの努力をしなければ、何年たっても少し難しい話になるとお手上げということになりかねない。

英語圏に住んだ場合には少し事情が違う。たいていの人には英語が苦手だと思っている。学校で苦手意識をたたきこまれているのだ(学校英語の最大の問題はここにある)。だが、苦手意識を払拭すると、数か月もすればやはり日常会話に苦勞しなくなる。それだけでなく、その後も上達して難しい話にもついていけるようになるし、読み書き聞き話すというすべての面で、英語力が飛躍的に高まっていくことが少なくない。

非英語圏と英語圏とでこのような違いがあるのは、日本人が一般にしっかりした英語教育を受けてきているからではないだろうか。

このような事実をみていけば、日本の英語教育は文法偏重で読むことに偏っているから、何年やっても日常会話だつてろくにできるようにならないという常識はどこかおかしいことに気づくはずである。ほんとうにそうなのかと疑うようになれば、英語教育について違った問題がみえてくるかもしれない。

もう10年近く前の話だが、しばらく翻訳学校に行っていたことがある。数年たって、つくづく嫌になった。翻訳の教育などできるはずがない、できるはずがないことをやって、わずかではあれお金をいただくのは、詐欺のようなものではないかと思ったのだ。

詐欺にひっかかるのならともかく、詐欺を働くのはいやだと考えて、翻訳教育はやめることにした。

その理由はいくつかあったが、そのひとつはこうだ。翻訳学校に通う人たちはみな、英語に自信をもっている。自慢の英語力を活かした仕事がしたいというのが、たいていの人々の動機だ。なぜ英語に自信をもっているかということ、帰国子女かそうでなければ学校で英語の成績が良かったからだ。ところがである。得意なはずの英語をしっかりと読める人はほとんどいないのだ。とくに、英文の文法構造を間違いなく解析できる人がほとんどいない。主部とか述部とかも分からない人が多いし、並列や代名詞、代動詞を正しく読みとける人はきわめて少ない。英文法も分からないのに、翻訳なんぞできるはずがない。そう考えたのだ。

だが、結論を早まったかもしれないと、今では考えている。みなが決まり文句のように文法偏重は良くないといい、読むことに偏りすぎるのは良くないといっているとき、日本の英語教育の質がじつは、肝心の文法と読解力の点で大きく低下しているのである。自慢の英語力を活かした仕事がしたいからと、翻訳学校に通ってくる人たちすら、文法知識が不足していて、英文を読みこなす力がない。英文を読みこなせないのであれば、いくら会話がうまくても、英語で重要な知識を学ぶことはできない。本や論文を読んで学ぶことができないだけでなく、授業などを聞いて学ぶこともできないはずだ。難しい話を聞いて内容を理解するには、同じことが書かれている文章を読みこなせる力が不可欠だからだ。そうであれば、英語教育の質が低すぎるから翻訳教育などできないと考えるのではなく、逆に、英語教育のほんとうの欠陥、文法と読解力の軽視を補う方法を考えることができるかもしれない。

英語教育では、英会話も必要だろう。日常会話ぐらいは覚えておく方がいい。だが、会話についてはもっと重要な点を教えておくべきだ。第1に英語がじつに多様であることを教えるべきだ。じつに多様だから、はじめはまったく聞き取れないのが当たり前なのだ。第2に、慣れれば誰でも会話ができるようになることを教えるべきだ。はじめはまったく分からなくても、何度でも聞きなおしていれば、数か月もすると慣れてくる。慣れれば、日常会話は誰でもできるようになる。慣れるまで使えと教えておくべきなのだ。

そのうえで、英語教育は文法と読解力をもっと重視するべきだと思う。帰国子女か、学校で英語の成績が良かった人が集まる翻訳学校で、英文をまともに読め

る人がほとんどいないのだから。

文法偏重は良くない、文法を詰め込むのは良くないという意見が強い。このためだろうが、文法は嫌われている。文法なんぞにこだわらず、英語を英語として、自然に感覚で理解できるようにすべきだと思っている人が多い。日本語文法などろくに知らなくても、日本語の読み書きや会話に苦労していないではないかと。

たしかに日本語の文法など、誰もほとんど知らない。だが、文法というものはそもそも、そういうものなのだ。日本語文法の研究は江戸時代にはじまったという。その目的は古文を正しく読めるようにすることにあった。古文は日常的に使っている言葉とは違う。日常的に使っているわけではない言葉で書かれたものを読むには、文法を知る必要がある。これがそもそも文法というものが意識されるようになった理由なのだ。ヨーロッパでもそうだ。日常的に使っている言葉なら文法はそれほど重要ではない。文法が重要になったのは、ラテン語など、日常的には使っていない言葉を学ぶ必要に迫られたからである。

日本語を母語にして育ったものが英語を学び、英語で何かを学ぶためには、文法は不可欠である。文法偏重は良くないなどと言われてその気になってはいけなない。文法を学ばなければ、英語を学ぶことはできないし、英語で何かを学ぶことはできないのだ。

ではどうすればいいのか。文法と読解を学ぶ方法、教育する方法はあるのか。日本の英語教育の歴史を振り返ってみれば、おそらくは恰好の方法が使われてきた時期があることが分かる。どのような方法なのかというと、翻訳を教える方法である。歯が立たないと思えるほど難しい本を読み、翻訳する方法である。

この方法にはいくつもの利点がある。第1に、歯が立たないと思えるほど難しい文章は、勘や感覚では読めない。文法構造を解析し、正しく理解しないかぎり読み解けない。だから、いやでも文法の重要性を意識するようになり、文法を学びなおしたいと思うようになる。

第2に、英文を読むだけでなく、日本語に翻訳するので、原文の内容を日本語で理解する訓練を積むことができる。外国語を外国語として学ぶべきだという意見があるが、少なくとも日本で生まれ暮らしている場合にはそれは不可能だと考えておくべきだ。日本語でものを考えるように脳の配線ができあがっているから、

日本語で理解しないかぎり、何もほんとうの意味では理解できない。外国語を学ぶのは、外国語を使って何かを学ぶためなので、学んだことを日本語で理解する訓練を積むのはきわめて重要なことだ。

第3に、英語の文章を日本語に翻訳しようとする、英語の論理や感覚と、日本語の論理や感覚との違いに敏感になる。その結果、英語の論理や感覚と、日本語の論理や感覚とをどちらも理解できるようになる。言い換えれば、考える力がつくのだ。

英語で暮らし、学び、仕事をしていれば、数か月もすると英語で話し、書くのが自然だと思えるようになる。頭のなかでいちいち翻訳作業をしているのは時間がかかるので、英語で直接に反応する配線が脳のなかに作られてくるのだ。英語で考えていると思えるようになるが、ほとんどの場合、これは錯覚にすぎない。根本のところでは長い年月をかけて作られた日本語の配線で考えている。この配線を活用しなければ、思考能力が低下する。英語の論理や感覚と、日本語の論理や感覚との違いをしっかりと把握するように努めれば、脳のすべての配線を活用できるようになるだろう。

翻訳教育は明治から大正、昭和の半ばまで学校でしっかりと行われてきた。いまでもある年齢より上の世代の人間には、翻訳はできて当たり前だという感覚がある。翻訳学校に通う人がいるのは信じがたいことだと思われている。中学から大学まで、何のために教育を受けてきたのかというわけだ。だが、この世代で翻訳教育を受けた人のうち、ほんとうの意味で翻訳ができる人はきわめて少ない。たいていは、英文和訳ができるとしても、翻訳はできない。英文和訳と翻訳の違いを理解できていない。文法を学び、単語の訳語を学んでも、翻訳ができるとはかぎらないのだ。文法が分かり、単語の訳語が分かっても、それでほんとうに理解できるほど、外国語は簡単ではないからだ。

したがって、翻訳教育を行っても、翻訳者を養成できるとはかぎらない。だが、少なくとも英語で何かを学ぶ力を伸ばすことはできるはずだ。日本は明治以降、翻訳教育に力をいれてきた。この点と、欧米以外の国のなかで真っ先に近代化をなし遂げることができた点との間に関係がないとは思えない。だから、翻訳教育を馬鹿にできないことは確かだと思える。

猫は……？

猫には不思議な力があるといえます。背を丸め、目を細めて、遠くを見つめているその姿は、まるで深遠な思索に沈んでいるように見えることがあります(本当はぼーっとして、何も考えてないのだと思いますが!)。古代から猫は神秘の象徴であり、エジプトでも北欧でも神とあがめられていました。化け猫や魔女の使いといったおどろおどろしい役回りをつとめることもあり、まさにミステリアスな雰囲気を持っています。

当然、ミステリに猫は欠かせない存在です。横溝正史の『本陣殺人事件』(角川文庫ほか)や仁木悦子の『猫は知っていた』(講談社)のように、猫が事件のキーポイントになっている場合もありますが、頭のにぶい人間たちをさしおいて、堂々と探偵役をつとめる賢い猫もいます。

日本では赤川次郎の三毛猫ホームズシリーズが有名です。海外でもリタ・メイ・ブラウンのトラ猫ミセス・マーフィーシリーズ(正確にはリタ・メイ・ブラウンとその飼い猫のスニーキー・パイ・ブラウンの共著ということになっています)や、ドイツ在住のトルコ人アキフ・ピリンチの雄猫フランシス・シリーズ(ピリンチはサイエンス・ライターのロルフ・デーゲンと共に『猫のしくみ 雄猫フランシスに学ぶ動物行動学』という本も書いています)などがすぐ思い浮かぶところでしょう。

しかし、猫探偵といえば、今回ご紹介するリアン・J・ブラウンのシャム猫ココ・シリーズを忘れるわけにはいかないでしょう。

[リアン・J・ブラウン](#)は実際にココという名のシャム猫を飼っていて、その猫を失った悲しみから、ココが登場する最初の短編ミステリを書いたといえます。その短編はエラリー・クイーンズ・ミステリ・マガジン誌に掲載され、エラリー・クイーンにすすめられて長編を書きはじめました。こうして1966年にココ・シリーズの長編第一作『猫は手がかりを読む』(羽田志津子訳・ハヤカワミステリ文庫)が刊行されました。『猫はソファをかじる』(羽田志津子訳・ハヤカワミステリ文庫)、『猫はスイッチを入れる』(羽田志津子訳・ハヤカワミステリ文庫)までは年1冊のペースで続いて刊行されたのですが、4作目の

『猫は殺しをかぎつける』は完成していたものの、出版社側が出版をとりやめ、長らくお蔵入りになっていました。この作品が日の目を見たのはなんと20年近くたった1986年でした。しかし刊行されるやいなや大好評を博し、シリーズは再開しました。そしていまや長編26作を数える大シリーズになっているのです。

ココ・シリーズの魅力はまず何と言っても、猫の行動の描写の的確さです。猫好きなら誰しもまさに「ハートをわしづかみ」にされてしまうような猫の愛らしい仕草や、気まぐれで、自分勝手に、でもどこかさみしがりやな習性を、愛情のこもった筆致で描いています。

猫好きというのはどこか屈折した人種なのか、猫に振り回されているのをわかっていながら、それを楽しんでいる人が多い気がします。ココの飼い主、元新聞記者のジム・キラランも例外ではなく、嬉々としてココに振り回されています。事件に巻き込まれるのも、真相を解明するのも、みなココの胸先三寸のように見えなくもありません。いくら賢くても人間の言葉が喋れるわけではないので、ココは鳴き声や仕草で、キラランにそれとなくヒントを出したり、捜査に必要な場所に連れて行くように仕向けたりしています。そしてもちろん事件に関係ない部分でも(贅沢な食べ物かほしいとか、同居猫がほしいとか、嫌いな客には帰ってほしいとか……)キラランを軽々と操縦しているのです。

私事で恐縮ですが、我が家にも一匹猫がおります。ココのような頭脳明晰な探偵猫というわけではないのですが、人間の操縦術はなかなか堂に入ったものです。元々猫が好きではなかった人まで、彼女(雌なので)につぶらな瞳でじっと見つめられたり、ちょっと首をかしげてか細い声で呼びかけられたりしているうちに、いつの間にか必死で機嫌を取るようになっていくのです。猫に魅了されてしまった人というのは言葉遣いでわかります。必ず「猫が近くで寝てくれている」とか「目の前であくびをしてくれた」とか「足にすりすりしてくれた」とありがたそうに言うからです。そんなに自分に馴れてくれたのか、とうれしくなってしまうのでしょうか。猫はただ単にのんびりしているだけなのに。そして猫のためにドアを開けたり、寒くな

いように暖房をつけてやったり、つつい猫につくしてしまいます。ここまでくるともう猫の術中にはまっていて、逃げることはできません。そういう私が一番メロメロになっているのですが……。

脱線はこのくらいにして、シャム猫ココのデビュー長編『猫は手がかりを読む』を紹介しましょう。元新聞記者のジム・キラランは豊かな口ひげをたくわえた四十代の魅力的な独身男性です。かつては賞を取るほどの敏腕記者であり、犯罪実録の著作もありましたが、アルコール中毒と離婚という苦い過去があり、その時期に仕事も信用も失ってしまっていました。そんなキラランがもう一度新聞の仕事をしたいと、中西部の大都市にあるデイリー・フラクション紙を訪ねるのがこの作品の冒頭のシーンです。

屈折した思いと緊張を抱えながら、自分よりはるかに若い編集長の面接を受けます。そこでもらった仕事は美術欄のコラムでした。全くの門外漢であるキラランに美術展をめぐったり、芸術家に会ったりして、新鮮な切り口でコラムを書いてほしいという依頼でした。気が進まないまま仕事を始めたキラランは、気難しい美術評論家マウントクレメンズに出会います。そしてなぜか気に入られ、マンションの一室を貸すかわりに、自分が留守の間の猫の世話をしてほしいと頼まれるのです。部屋探しに困っていたキラランは引き受けます。これがキラランとシャム猫ココの出会いでした。

ココは正式な名前をカウ・コウ・クンといい、出会いの時からクールで思慮深げな目をした猫でした。マウントクレメンズは、ココの知的なたたずまいを愛し、この猫は毎日新聞を読んでいるのだとキラランに語りました（ただし、文字を左からではなく右から読んでいるようでしたが）。

やがてマウントクレメンズはマンションで、何者かに殺害されてしまいます。飼主を失ったココを預かったキラランは、猫に導かれるままに、事件の真相を解明していくことになるのです。ラストでは二人（？）で協力して犯人を捕まえ、そしてキラランはココと暮らしていくことを決意したのでした。

その後、第2作『猫はソファをかじる』で、キラランとココの男性コンビに、ヤムヤムというかわいらしい雌のシャム猫が加わり、華を添えます。気高く思慮深いココとは違い、ヤムヤムは人なつっこく甘えん坊でいたずら好きです。ヤムヤムがキラランの膝にのぼってきて、胸に片方の前足をかけ、もう片方の前

足でキラランの口ひげを不思議そうにそっと触っているシーンは、たまらなくかわいらしいものです。

第5作『猫はブルームスを演奏する』（羽田志津子訳・ハヤカワミステリ文庫）で、キラランは思いがけなく巨額の遺産を相続することになります。ただしそれには「どの街からも四百マイルは北にある」ムース郡という田舎町に住まなければならないという条件がついていました。大都市での生活を謳歌し、新聞記者の仕事にやりがいを感じていたキラランは大いに悩みますが、結局ムース郡に住む決心をします。こうしてシリーズは第6作『猫は郵便配達をする』（羽田志津子訳・ハヤカワミステリ文庫）から、カナダ国境近くの町に舞台を移し、扱う事件も大都市の犯罪から小さな町ならではの人間関係の中で起こる事件へと変わっていきます。

邦訳ではこの2冊を飛ばして、第7作を先に出してしまったため、当時、日本の読者にとっては、キラランが突然田舎町にいるというわかりにくい状況になってしまっていました。現在も邦訳は必ずしも原書の刊行順ではないために、邦訳の刊行順に読むと、作中で触れられている前のエピソードがわからない場合があります。

ムース郡に移ってからの作品を紹介しましょう。第7作『猫はシェイクスピアを知っている』では、ココはなぜか毎日シェイクスピアの本だけを本棚から蹴落とします。「テンベスト」、そして「ハムレット」。そこに何か意味があるのかどうか、キラランは気になります。ちょうどキラランはつぶれかけていた地元の小さな新聞社の復興を援助しようとしていました。同時に図書館司書のポリー・ダンカンとのロマンスがゆっくりと進んでいます。料理上手な家政婦コブ夫人（未亡人です）も、ある男性との恋愛に胸をときめかせていました。そんな中、新聞社が放火されて印刷所も編集室も焼けてしまいます。キラランは新聞社の創業一族ぐつとウィンター家にまつわる血なまぐさい歴史を知り、そしてまた、グッドウィンター家の末裔が悲惨な死を遂げて……。

真相は意外で、悲しいものでした。真相を知って悲しむ人の心を癒したのはココの優しさだったのです。

未訳の作品の中からも1冊。The Cat Who Brought Down the Houseを紹介しましょう。ムース郡に突然、ハリウッド女優が引っ越してくることがわかります。何でも町の旧家サッカレイ家のテルマという女性で、ムース郡で育ち、ハリウッドに行くと女優として成功

し、引退した今、故郷に戻ってくるというのです。時ならぬスターの凱旋に町中はざわめき、キラランも興味津々です。秘書兼運転手兼料理人のジャニスと甥のディッキーを引き連れて現われたテルマは、女優らしくプライドが高くエキセントリックな性格で、甥を溺愛していました。ディッキーの父親であるテルマの双子の兄弟は何年も前に亡くなっていて、その死については不審な点があるという噂が流れていました。テルマが飼っている鸚鵡の誘拐事件（エリザベス・フェラーズの『猿来たりなば』[中村有希訳・創元推理文庫]を思い出しますね！）や、テルマが始めた映画クラブをめぐる疑惑と不可解なことが続きます。そんな中、ココはなぜか隣町で身元不明の男が殺された時間に、死を知らせるかのような鳴き声をあげたのでした……。

ココ・シリーズはいわゆるコージー・ミステリであり、特に舞台がムース郡に移ってからは、ほのぼのとした雰囲気ストーリーが展開していきますが、かなり悲しい結末が待っていることが特徴だと思います。この作品のラストもまたほろ苦いものです。

リリアン・J・ブラウンの作品ではないのですが、The Cat Who...で始まる題名のミステリがあります。Robert Kaplow の The Cat Who Killed Lilian Jackson Braun、ココ・シリーズ風に訳せばそう、「猫はリリアン・J・ブラウンを殺す」です！ココ・シリーズのパロディなのです。

悪名高いナイトクラブで深夜、リリアン・J・ブラウンの死体が発見されるというかなり過激な出だしで始まるのですが、ページをめくればめくるほど過激度が増していく、取り扱い注意のパロディです。探偵役はジム・キララン（Jim Qwilleran）ならぬジェームズ・カフカ（James Qafka）で、カフカの飼い猫の名前はイントン（Ying Tong）とプントン（Poon Tong）です。カフカ、通称ミスターQ（キラランと同じです）は童話作家で、被害者リリアン・J・ブラウンとは知り合いです。リリアン・J・ブラウンが死の間際にカフカの留守番電話に「ラベンダーインク」という謎のメッセージを残していたことから、カフカは事件に巻き込まれています。やがて事件の背後には「マルタの鷹」ならぬ、「マルタのあらいくま」をめぐる秘密があるのがわかってきます……。

全編痛烈なパロディでいっぱいです。俎上にのぼっているのは、リリアン・J・ブラウンばかりではありません。マルタの鷹、コナン・ドイル、文学賞からタレントのプリトニー・スピアーズまで、ありとあらゆるものを皮肉っています。

また捜査に当たる刑事がカフカに「どうせこの本の探偵役はあなたなんだから、私がどんなに一生懸命やったところで、どうせ解決するのはあなたなんだ」とすねてみたり、登場人物が「この章では私が主役だ」と喜んでみたり、その自由さには目を見張ります。

また、ドタバタ喜劇のようなアクションの連続のあとに、一応ちゃんとした結末があることに妙に感心してしまいました。

この本は、扉の見返しや奥付にまで遊びがあって、まさにしゃれのめしている1冊です。

本物のココ・シリーズに話を戻すと、シリーズにはいわば番外編といったような本が2冊あります。1冊目は Short & Tall Tales というキラランが地元の人々にインタビューして集めたムース郡の伝説やエピソード集。もう1冊の The Private Life of the Cat Who...はキラランの日記から、ココとヤムヤムに関する部分を抜粋した、という本です。特に後者はココとヤムヤムとキラランの歴史がわかりやすくまとまっているので、これからシリーズを読んでみようという人にも、すでに読んでいてココとヤムヤムの魅力をもっと味わいたいという人にもお勧めです。

リリアン・J・ブラウンは生年を公開していないので正確なところはわかりませんが、略歴に長年新聞社に勤務した後、小説を書き始めたとあり、しかもデビューは60年代ですから、かなりの高齢であることは確かです（『海外ミステリー事典』[権田萬治監修・新潮社]には、「1916年頃」と書いてあります）。けれど、精力的に執筆を続けているようです。2003年の年末には新作の第26作目 The Cat Who Talked Turkey が刊行されています。ココとヤムヤムとキラランのトリオのこれからの活躍が楽しみです。

リリアン・J・ブラウンの作品リストを[翻訳通信のサイト](http://homepage3.nifty.com/hon-yaku/tsushin/my/dt/ljb.html)に掲載しました。URLは以下の通りです。
<http://homepage3.nifty.com/hon-yaku/tsushin/my/dt/ljb.html>

翻訳と日本文化

当月号所載、山岡洋一・文「英語教育の盲点としての翻訳教育」のゲラ(ネットの下原稿を正確にはゲラとはいうまいが)を見て、私もつねづね考えていることを頭にまとめてみたいと思った。いつもの細かい英語読解技術解説は今回止めにし、大上段から翻訳の日本における役割を書いてみる。気楽に読んでください。

外国、とくにアジア諸国に出かけて英語が話せない、本当に大学を出たのかと訝られるという話をよく聞く。だから日本の英語教育はだめなのだ、続くわけだが、これは短絡というもの。自国語で高等教育を受けられない国では、英語で授業をとらざるを得ず、必然的に英語がうまくなるという仕組みだ。自国の言葉で高等教育を受けることのできる日本人は幸せもの。明治初期にいち早く西洋式の教育を受けた夏目漱石は、植民地でもない日本の高等教育が外国語でなされることに疑問を感じていた。「日本の Nationality は誰が見ても大切である。英語の知識位と交換の出来る筈のものではない」と。だが明治40年になると、大学での授業は大方日本語で講ぜられるようになっていた。そんな短期間に、自国語での高等教育が可能になったのは、ただただ日本語の咀嚼力の強さによるものだ。

知られざる概念を説明する苦勞は並大抵でない。江戸時代、オランダ・バタビア総督からの書簡に書かれた liberty 相当語の最初の訳語は「わがまま」であり、その書簡を読んだ将軍をいたく立腹させたという。明治初年に洋学者、中村正直はこれに「自由」との訳語を創案した。福沢諭吉は思考錯誤の末、speech を「演説」、society を「社会」と訳し定着させた。抽象概念、技術用語の多くはこうして明治の先人たちが工夫・開発し、漢語の本場、中国に逆輸出されているものも多い。

明治文学は「翻訳文学」といってよいほどヨーロッパ諸文学ならびに諸語の影響を受けている。いや、欧州の着想・思想・表現法を日本語に移しかえることこそ、明治時代の文士の仕事だったといつてもよいかもしれない。だから、現代日本語文にはヨーロッパ語の名残がみられて当然なわけだ。

現代日本語は森鷗外が基礎を作り、夏目漱石が確立し、芥川龍之介が完成させたともいわれるが、その諸家の作品には欧文訓読調の箇所が見え隠れする。例えば、森鷗外「簡単に平凡な詞と矛盾しているやうな表

情を再び比女子の目の中に見出した」(『青年』)。夏目漱石「我輩はいつでも彼等の中間に己を容るべき余地を見出して、どうにかかうにか割り込むのであるが...」(『我輩は猫である』)。芥川龍之介「先生は奥さんに熱心な聴き手を見出したことを満足に思った」(『手巾』)。これら一流の文筆家は、いずれも外国語の達人で、英文の発想自体が身体に沁みついていたのだろう。いずれも find が見え隠れするが、作家の文体とも相俟って、不自然な感じがしない。

咀嚼力の強さは、日本古来からのもので、王仁博士が千字文をもたらした時も、もともとあった和語は減びることなく、むしろ漢字をうまくとり入れて日本語を豊かにする方向に働いた。陽光、陽の光り。学習、学び。山岳、山々。など、同じ意味でも微妙にニュアンスが異なる表現を可能にしている。

日本文化はこの言語の二重構造に象徴的に見られる

好評発売中

イーエル大学教授
エイミー・チュア・著
久保恵美子・訳

●2,300円+税
4-334-96161-4

わずかにパーセントの人間が豊かになるために、残りの人間が尊厳を失っていく。アメリカに支配された世界に未来はあるのか。

富の独裁者
WORLD ON FIRE

世界の論客たちを震撼させた
気鋭の女性学者 衝撃のデビュー作

〒112-8011 東京都文京区音羽1-16-6 光文社
http://www.kobunsha.com

ように、柔構造である。入ってくるあらゆる外国文化は日本的思考・日本語のフィルターを通してろ過され、日本的に変容しかつ持続し、本国ではその痕跡さえなくなっても生き永らえる。外来宗教も日本的色合いを濃くし、遠くインドに源流を発する胡旋舞・伎楽などの芸能は日本でのみ残り、形を変え、雅楽・能楽となり、更には能・狂言を生み、今日まで続いている。世界の文化・芸能は極東の日本に流れこみ、そこでたくみに日本化される。これこそ日本文化の特質といえよう。あらゆるものを「翻訳」してしまうことこそ、日本人のアイデンティティなのだ。

ある期間外国文化の摂取が続くと、こんどはそれを消化するための時期（国風文化、室町文化、江戸文化）に替わり、それが何回か繰り返されて、現代に

至っている。アメリカはじめ、世界各国の文化が怒涛のように押し寄せ、それを飲みこもうとアップアップしているかのように見える現在の日本。明治から現代までの移入の時代はそろそろ終わり、日本らしさを作りこむ時代にさしかかっているのかもしれない。

だが心配なのは、教養主義の没落とともに文章を読む力が明らかに落ちてきていることだ。抽象概念が詰まった外国文を精確に読めてこそ、つまり翻訳できる力がついてこそ、外国語での情報を間違いなく把握でき、外国語での高度の会話もできる。紋切り型の日常会話など下手にやると誤解を増すばかりだ。外来文化を理解しきった時、日本では新たなものが生まれてきた。平安、室町、江戸...これからの平成はどうなるであろうか。

＝ 柴田耕太郎 主宰 [翻訳ジム] 受講生募集のお知らせ ＝

2004年3月1日開講

1年間徹底して英文を読み解く全日制[翻訳ジム]のお知らせです

翻訳は教えられるか、というのがかねてからの自問でした。今は教えられないという結論に達しています。なのになぜ翻訳教室を開くのか。

私が開発したいわば「英文訓読」の手法で、受講生に一点の曇りなく読み解く技術を与えたいから。正しく読めさえすれば、あとは本人の文体の問題。ひとがとやかく言うものではありません。また、翻訳を商品として見た場合、現場を踏んだ

人間でなければわからぬ決まりごとがあります。その原則を受講生に伝えたいから。翻訳の瑣末な技術など知らずとも、きちっと読めてルールを知れば、翻訳は自ずからできると確信します。

人生のなかの1年間、毎朝、じっくり英文に取り組んでみませんか。あなたの中の何かが変わるでしょう。

株式会社アイディ
柴田耕太郎 主宰 『翻訳ジム』

事務担当 前川

TEL : 03-3357-1189

FAX : 03-3357-4489

Email : educa@id-corp.co.jp

〒162-0054 新宿区河田町7-6 ID河田町ビル